

智顛の『四教義』と諦觀の 『天台四教儀』の比較研究*

李 承南**著・水谷 香奈***訳

抄録

智顛(538~597)の『四教義』と諦觀(?~971)の『天台四教儀』はいずれも藏通別円の四教を中心として様々な事柄を述べており、ここでは叙述形式と中心内容の観点から比較しつつ、相違点を明瞭にしてその理由を解明し、同時に共通点を見出した。『四教義』はまず四教について述べてから経教について述べていたが、これは四教をもとに経典を理解し、そこで説かれたように修行をすれば迅速に真理を悟ることができるからである。『天台四教儀』は、薬の処方に対応する経教を先に述べ、薬の味に対応する四教を後に述べた。『四教義』はまず修行について述べてから次に階位について述べている一方、『天台四教儀』はまず階位について述べ、次に修行について記述していた。『天台四教儀』では、真理から教門と観門が出て、修行を通じてこれらの門に入ることで真理に至ることができ、その段階として階位があるという体系が確立されていないためであり、特に教門によって真理に通じるという側面がないためだと見ることができる。『四教義』は門を通して真理に入らなければならないと語っており、真理とそこに通じる門を重視している。『四教義』と『天台四教儀』では、階位を説明すると共に空仮中の三諦を基盤としていることを明らかにし

*原題「지의(智顛)의 『사교의(四教義)』와 제관(諦觀)의 『천대사교의(天台四教儀)』의 비교연구(比較研究)」

**이승남(イ・スンナム)、金剛大学校教授。

***東洋大学東洋学研究所客員研究員。

た。結論としては『四教義』は四教に基づいて経教を理解し、説かれた通りに修行をして真理を悟るべきであるとし、真理とそこに通じる門、そして門に入る段階として階位という体系を確立しており、『天台四教儀』は薬の処方にあたる経教を知るべきであり、薬の味にあたる四教を理解して修行し真理を悟るべきであるとしており、『四教義』と『天台四教儀』は四教の階位を説明しながら、いずれも空仮中の三諦を基本としていることがわかった。

I. 序論

智顛(538~597)の『四教義』と諦観(?~971)の『天台四教儀』はいずれも蔵通別円の四教を中心に述べている。たとえ教を中心に記述していても観に関する部分もあり、真理と階位など様々な事柄をまとめて記述している。

『四教義』は全7章からなっている。第一釈四教名、第二弁所詮、第三明四門入理、第四明判位不同、第五明権実、第六約観心、第七通諸経論などに体系的に連結されている。第1章では、蔵通別円など四教の名前を解釈している。第2章では、四教で教える真理について説明している。第3章では、四教で教える真理に入る門について説明している。第4章では、四教で教える真理を悟る段階として、階位について説明している。第5章では、四教を方便と真実に分けて説明している。第6章では、心を観じ四教を起こすことについて説明している。第7章では、様々な經典と論書にある四教について説明している。こうした7章すべてが蔵通別円の四教について説明している。

『天台四教儀』は章を区分して述べていない。しかし、記述された内容に沿って区分すれば大きく3つに分けることができる。第1の化儀四教と五時、第2の化法四教、第3の四教修行などに分けることができる。ここで化儀四教は、頓教、漸教、秘密教、不定教である。化法四教は蔵教、通

教、別教、円教である。四教修行は藏教修行、通教修行、別教修行、円教修行である。化儀四教は薬の処方と同じであり、その内容は藏通別円の四教から離れていない。このように、化儀四教と五時、化法四教、四教修行はいずれも藏通別円の四教について説明している。

『四教義』と『天台四教儀』は共に藏通別円の四教を中心に様々な事柄を述べている。ところがいくつかの観点では違いを見せている。ここでは大きく二つの観点に焦点を当てたい。まず敘述形式であり、次に中心内容である。主要な部分での相違点が何かを明瞭にして、その理由を解明しようと試み、また共通点があることも明らかにしたい。

Ⅱ. 敘述形式の比較

『四教義』はまず藏通別円の四教を述べてから、後に五時教の經教について記述している。一方、『天台四教儀』はまず五時教の經教を述べてから、後に藏通別円の四教について述べている。また、『四教義』はまず修行について述べてから、後に階位を述べている。一方、『天台四教儀』はまず階位を述べてから、後に修行について述べている。このように記述順に違いがある。

1. 四教と經教

『四教義』では次のように述べている。

仏陀は四教を用いて、一切の頓と漸の經典と論書を成し遂げた。經典を解釈すれば、どうして四教を超え出ることができるだろうか。…中略… 釈迦牟尼仏が世に出現され、經教を残された。同じくこれらの四教を超えることはなく、このようにすべての經典を包括して、ことごとく尽くさないものはない¹。

四教がすべての經典と論書を成し遂げた。したがって、經典の解釈も四教を超えない。四教を知ればすべての經典を知ることになる。そこで『四教義』では、四教を先に説明してから、その後で經教にある四教について述べている。

全7章から見ると、第1章が釈名であり、最後の第7章が經教に関するものである。また、第一釈四教名は1. 正釈四教名、2. 覈定四教、3. 引証、4. 料簡、5. 明經論用教多少不同など、5項目で説明している。ここでも最初に四教の名称について定石をしてから、最後に華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃など五時教の經教にある四教について説明している。

第二弁所詮では、四諦の真理、三諦の真理、二諦の真理、一諦の真理など、4項目に分かれている。これら4項目を各々説明しつつ、その各々の最後に必ず五時教の經教によって真理が異なって説かれていることを明らかにしている。

第四明判位不同では、1. 約三藏教位明淨無垢称義、2. 約通教位明淨無垢称義、3. 約別教位明淨無垢称義、4. 約円教位明淨無垢称義、5. 約五味以結成、6. 明約經論弁位多少など6項目にて明らかにしている。ここでも、先に四教の階位について明らかにしてから、最後に五時教の經教によって階位が異なって説かれていることを明らかにしている。

最後の第七通諸經論では、1. 明対諸經論と2. 通釈淨名經文義の2項目に分けて説明している。ここではまず、華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃など、様々な經典が備えている四教について説明している。次に方等經の中の一つである『維摩經』が備えている四教について説明している。『維摩經』の全14品を1. 通室外四品、2. 通室内六品、3. 通出室四品の3項目に分け、各品にある四教について説明している。

このように『四教義』では、まず四教について説明してから、様々な經教にある四教について説明している。最初に四教を説明している理由は、仏教を学ぶ者が仏陀の言葉を重要だと考えるようにするためである。第一

釈四教名の中にある5. 明経論用教多少不同では、様々な經典と論書を集めてそこから四教義を抽出し、これによって小乗と大乘の様々な經典に到達させ、仏陀の御言葉を尊敬し尊重することを明らかにしている。

『四教義』では次のように述べている。

後代に經典を広める人々は、様々な經典の意を集めて一つの論書を書いて通じるようにした。そうすると、ついに後代に生まれた人々は誰もが、論書は多く經典は少なく、經典を軽視して論書を重視すると言うようになる。今、様々な經典と論書を集めて四教の意を立て、すべての大乘と小乗の經典に通じるようにする。これは後代の賢明な人が仏陀の言葉を敬い、重要視し、その枝葉を捨てることを望む心である。もし、よく心の全てを傾けて大乘方等について説かれたことを聞いて受持し、読んで覚え、書いて説かれたように修行をすれば、その功德は無駄にならないのみならず、またよく真理にかなう重要なものとなるのだ²。

様々な經典で説かれていることを集めて一つの論書を作る。そしてこの論書をもって様々な經典を理解する。もしこのようにすれば論書を多く見て、經典を読まなくなる。結局、經典を軽視して論書を重視することになる。

仏教の修行者は、仏陀の言葉がそのまま記された經典を重視しなければならない。經典に基づいて修行をしてこそ、迅速に真理を悟ることができる。このような趣旨から四教を立てた。四教がすべての經典と論書を成就する。經典を解釈すれば四教の範囲に収まる。つまり、四教を知ればすべての經典を知ることになる。したがって、四教を理解して經典を見なければならぬ。このような意味で四教を立て、すべての大乘と小乗の經典に通じさせ、仏陀の言葉を敬って重視し、その枝葉を捨てさせるとした。仏教の修行者が四教をもとに經典を見て、そこに説かれたように修行すれば、迅速に真理に符合するようになるというのである。

このように『四教義』は、四教を通じて経教を理解するようにした。四教はすべての経典を形成する。すべての経典から四教を抽出したのである。したがって、四教を理解すればすべての経典を理解することができる。四教をもとに経典を理解し、そこに説かれたとおりに修行すれば、即座に真理を悟ることができる。このような趣旨から、先に四教を述べ、次に経教について述べている。

『天台四教儀』は、まず五時教の経教を述べてから、藏通別円の四教について述べている。第一化儀四教と五時、第二化法四教、第三四教修行の3つに分けることができる。このうち第一化儀四教と五時から1. 頓教と華嚴時、2. 漸教と阿含時・方等時・般若時、3. 秘密教と不定教、4. 法華・涅槃時など4項目に区分して述べている。このように、頓教、漸教、秘密教、不定教などの化儀四教と華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華・涅槃時などの五時教を共に記述している。その後、藏通別円の四教について述べ、続けて四教に基づく修行について述べている。

『天台四教儀』では次のように述べている。「頓教・漸教・秘密教・不定教の四教は化儀四教といい、あたかも薬の処方のようなものである。藏教・通教・別教・円教の四教は化法四教といい、あたかも薬の味を見分けるようなものである」³。化儀四教は「如世薬方」と言い、化法四教は「如弁薬味」と言っている。医師は患者の状態に応じて薬を処方する。患者はその処方に従って薬を作って飲み、その味を知り、薬の作用で病気を治す。まず薬の処方があり、次に薬の服用があり、これにより治癒する。このような観点から、薬方に該当する経教を先に述べ、薬味に対応する藏通別円などの四教を後に述べたのである。

2. 修行と階位

『四教義』では先に修行について述べてから次に階位について述べている。全7章のうち、第1章では四教の名前を解釈しており、第2章では四教で教える真理について説明し、第3章では四教で教える真理に入る門に

ついて説明している。第4章では四教で教える真理を悟る段階として、階位について説明している。第3章では真理に入る門について説明する中で信行と法行の修行について述べており、第4章ではこのような修行を通じて真理を悟る段階として、階位について述べている。簡単に言えば、第3章では門を通して入る修行について語っており、第4章では入る段階としての階位を語っている。

まず、第二弁所詮では真理について四項目をもって述べている⁴。生滅・無生・無量・無作の四種四諦⁵、有諦・無諦・中道第一義諦または空仮中の三諦⁶、理外と理内の二諦⁷、一実諦の一諦⁸などから、真理について明らかにしている。真理について四諦、三諦、二諦、一諦として説明し、それぞれ1. 所詮之理、2. 能詮之教、3. 約経論にて述べている。四教によって説明される真理と、真理を説明する四教、そして五時教の経論から四教が説明する真理について体系的に明らかにしている。

次の第三明四門入理では、真理に入る四教の四門について明らかにしている。1. 略弁四門相、2. 正明四門入理、3. 明四悉檀起四門教、4. 約十法成四門義、5. 明信法兩行四門不同など5項目に分けられている。まず、四教のそれぞれにある有門、空門、亦有亦空門、非有非空門などの四門について分別する。次に四教の四門を通して入り出会う真理について明らかにする。次に四悉檀の因縁⁹が四教の四門を起こすことを明らかにしているが、これは四悉檀が四教の教門を形成することを説明したものである¹⁰。次に十法が四教の四門を成就することについて明らかにしているが、これは十乗観法が四教の観門を形成することを説明したものである¹¹。次に信行人が用いる四教の四種教門と法行人が用いる四教の四種観門について明らかにしている¹²。ここでは四教の四門があり、四門は真理に通じ、門には教門と観門があり、信行人は教門を用い、法行人は観門を用いて真理に入ることを説明している。このように四教の四門を通じて入る修行について述べている。

次の第四明判位不同では、四教の階位を明らかにしている。門を通じて

真理に出会っていく段階を区分したものが階位である。ここでは四教のそれぞれに四門があるが、多く用いられるものがあることを明らかにしている。漸教には四門があるが有門を多く用い、頓教にも四門があるが空門を多く用い、別教にも四門があるが亦有亦空門を多く用い、円教にも四門があるが非有非空門を多く用いる¹³。このような四教の四門は空仮中の真理に通じるが、その段階を区分したものが階位である。ここでは四教それぞれが多く用いる門を中心に、階位について詳しく明らかにしている。

このように第2章では真理について説明し、第3章では真理に入る門について説明しながら、その門を通して入る修行について語っており、第4章では真理を悟る段階としての階位について説明している。『四教義』では、まず修行について述べ、次に階位について述べていることが分かる。

『天台四教儀』では、まず化法四教について述べてから、次にこれら四教による修行があり、それぞれ二十五方便と十乗観法があることを明らかにしている。化法四教の内容を見ると主に階位について説明している。簡単に言えば、初めに階位について述べてから観法について述べている。

まず化法四教の中で漸教について説明¹⁴しつつ、簡潔に釈名を行い、三乗の根性があることを明らかにする。続けて三乗の中で声聞の生滅四諦教を説明する。そして三乗の修行階位を説明している。声聞の階位については、凡位と聖位に分けられている。外凡として五停心、別相念処、総相念処があり、内凡として煖・頂・忍・世第一があり、聖位としては見道と修道、そして無学道がある。縁覚について説明しながら、十二因縁教を受けて十二因縁観を行い、空諦を悟るという。菩薩の階位については声聞の外凡と内凡に照らして説明しており、一刹那に世第一位に入り、真無漏を発して三十四心によって見思の習気を断ち切って成仏することを語っている。

次に通教について説明¹⁵しつつ簡潔に釈名を行い、『摩訶般若波羅蜜経』に出る乾慧地などの十地¹⁶として三乗の階位を明らかにしている。続けて菩薩の中に利根と鈍根があることを語り、利根の菩薩が別教と円教に被接

することを説明している。

次に別教について説明¹⁷しつつ簡潔に積名を行い、様々な大乘經典で菩薩階位があることを語ってから、『瓔珞經』に基づいて慈悲と証得の相を明らかにするとした。十信は外凡であり、十住・十行・十廻向は内凡である。聖位は二つに分けられるが、十地と等覺は因位であり、妙覺は果位である。

次に円教について説明¹⁸しつつ簡単に積名を行い、すべての大乘の經典と論書に円教があることを明らかにしている。そして『法華經』と『瓔珞經』に基づいて、1. 五品弟子位¹⁹ [外凡]、2. 十信位 [内凡]、3. 十住 [聖人の始まり]、4. 十行、5. 十廻向、6. 十地、7. 等覺 [因位の終わり]、8. 妙覺 [果位] などの8つの階位について説明している。最後に六即階位を説明し、円教の階位についての説明を終えている。

『天台四教儀』では、化法四教の説明が主に階位に集中していることが分かる。そしてこのような階位についての説明を行いながら、四教で説いている三觀について言及している。藏教の三乗において析空觀で析色入空²⁰し、通教の三乗は体空觀により体色入空²¹する。別教の菩薩は從仮入空觀により真諦を見、從空入仮觀により俗諦を見、中道觀により中道を見る次第三觀を磨く²²。円教の菩薩は五品弟子位の初隨喜品から一心三觀を磨く²³。このように四教で説いている三觀について言及しつつ、これら三觀により迷惑を破壊して上昇する階位について説明している。

そして次のように述べている。

しかし、上記の四教に従って修行する時、それぞれ方便と正修があるが、二十五方便と十乘觀法である。もし教ごとにそれぞれ明らかにすれば、文があまりにも煩瑣であり、意味は異なるが名前と数字は異なるので、ここでは総体的に明らかにしたいと思うし、その意味を明らかにできるだろう²⁴。

ここで依教修行を明らかにしている。藏通別円の四教による修行があり、それぞれ二十五方便と十乘観法がある。

続けて二十五方便について説明してから、次のように述べている。

このような二十五方便は四教の前方便として必ず備えなければならない。もしこのような方便がなければ世間の禪定もなお得られないのに、まして出世間の妙理を得ることができるだろうか。しかし、前に教を明らかにするとき、すでに漸と頓の違いがあることを見ており、方便もまた違いがある。いかなる教に従って修行をするにも、そのたびに詳しく推し量らなくてはならない²⁵。

四教に二十五方便があり、必ず備えなければならないことを明らかにしている。教にも違いがあるように方便にも違いがある。四教のそれぞれに方便があり、その教に該当する方便を知らなければならない。

続けて正修について次のように述べている。「次に正修の十乘観法を明らかにする。また四教は名前は同じだが意味が違う。ここでは円教について明らかにしようとするもので、他の教はこれを例にすればよい」²⁶。四教に十乘観法があり、その名称は同じだが意味が違おうとした。そして、四教のうち、円教の十乘観法について説明するという。

このように『天台四教儀』では依教修行を明らかにしつつ、特に円教に基づいて十乘観法を磨くことについて説明している。(1) 観不思議境、(2) 真正發菩提心、(3) 善巧安心止観、(4) 破法遍、(5) 識通塞、(6) 道品調適、(7) 対治助開、(8) 知位次、(9) 能安忍、(10) 離法愛など10種類で説明しつつ、一念心が即空即仮即中の三諦円融であることを観ずる一心三観により真理を悟って四十二階位へ上昇しなければならないことを語っている²⁷。

上記に見るように『天台四教儀』では、第二化法四教にて三観により迷惑を破壊して上昇する階位について分別したのち、第三四教修行で十乘観

法について説明している。簡単に言えば、最初に階位について説明し、次に修行について説明していることがわかる。これらの側面は『四教義』とは異なる。『四教義』では、四門の修行について述べてから、その階位を明らかにしているからである。

『四教義』では、真理から教と観が出て、こうした教と観は互いに形成できるという。修行者は教を通して真理に出会うことも、観を通して真理に出会うこともできる。この時、教門と観門の修行を通じて真理を悟る段階として階位がある。

『四教義』では、第一釈四教名で四教と三観の関係について、次のように述べている。

問う。四教はどこから起こったのか。答える。今明らかにする四教は顧みるに、以前から明らかにした三観より起こって三観を成し遂げる。初めの従仮入空観は分析と体達、そして拙劣と巧妙の両方を備えている。二つの入空は同じではない。析仮入空から藏教が起こった。体仮入空から通教が起こった。もし第二従空入仮の中に従えば、すなわち別教が起こる。第三一心中道正観によれば、すなわち円教が起こる。問う。三観はまたどのようなものを原因として起こるのか。答える。三観はまた四教を原因として起こる²⁸。

ここで、藏通別円の四教が空観と仮観、そして中観の三観から出ており、四教は再び三観を成就するとした。析仮入空から藏教が起こり、体仮入空から通教が起こり、従空入仮から別教が起こり、中道正観から円教が起こる。また、藏教と通教から空観が起こり、別教から仮観が起こり、円教から中観が起こる。このように、四教と三観は互いを成立させる原因となる。続けて次のように述べている。

問う。教と観はまた何を原因として起こるのか。答える。教と観はす

べて因縁所生の四句から起こる。問う。因縁所生の四句は何を原因として起こるのか。答える。因縁所生の四句はすなわちこれ心である。心はすなわちこれすべての仏陀の不思議解脱である。すべての仏陀の不思議解脱は、最終的には有ると言えないものであり、すなわちこれは不可説である。それゆえ、維摩詰は口を閉じて沈黙して説かなかった。縁があれば、また説くことはできる。すなわちこれは、四悉檀を用いて、心に対して因縁所生の四句をもって説くということである。四種根性に応じて十二因縁により形成された衆生に説く。四種根性は、(1) 下根、(2) 中根、(3) 上根、(4) 上上根である。このような四種根性に従うことで、これによって教と観が妨げなく起こり、衆生に広く利益を与え、信行と法行の利益を完成する。これはすなわち聖人が法を説いたり、聖人が沈黙するという意味である²⁹。

教と観はすべて因縁所生の四句³⁰から起こり、因縁所生の四句は心から起こる³¹。言い換えれば、心から因縁所生・即空・即仮・即中の四句が起こり、このような四句から四教と三観が起こる。このような心は諸仏の不思議解脱であり、これは不可説である。だが、四悉檀の因縁があれば四句として説くことができる。聖人は心について沈黙したり、説法したりする。不可説なので沈黙し、因縁によって説くことができるので説法する。

聖人は衆生との因縁があれば、心に対して因縁所生の四句を説く。四種根性に応じて説くので四教が形成される。法門には、教門と観門が含まれている。教門を用いる衆生は信行人になり、観門を用いる衆生は法行人になる。これらの修行者が修行を通じて教門と観門に入れば、真理に出会うことができる。そしてこのような真理を悟る段階が階位である。そういう意味で『四教義』では、まず修行について述べてから、次に階位について述べている。

『天台四教儀』では、第二化儀四教で三観により迷惑を破壊して上昇する階位について分別してから、第三四教修行で依教修行を語りつつ十乘観

法について説明している。これらの説明を見ると、教から観が起こるとい
う側面は見出すことができる。しかし『四教義』で言うように、教から観
が起こるだけでなく、観から教が起こるといふ観点は見出しにくい。また、
観を通して迷惑を破壊して真理を悟っていくという側面は見出すことが
できる。しかし、『四教義』で言うように観門だけでなく、教門を通じて迷
惑を破壊し、真理を悟っていくという側面は見出しにくい。これは真理か
ら教門と観門が起こり、信行人と法行人の修行者が修行を通じてこれらの
教門と観門に入れば真理に出会うことができ、真理を悟る段階としての階
位があるという、このような体系が確立されていないためである。何より
教門によって直ちに真理に到達することができるが、このような側面が見
落とされているからだと思われる。

Ⅲ. 中心内容の比較

『四教義』は門を通じて真理に入らなければならないと言っている。こ
の意味で、真理とそれに通じる門を重視する。真理は不可説だが縁があれば
説くことができる。聖人が言教を通じて門を設定すれば、衆生はその門
を通じて真理に出会うことができる。門を通じて真理を探訪する段階を順
番に説明したのが階位である。『天台四教儀』は化法四教を説明しつつ主
に階位について述べており、迷惑を破壊して真理を悟っていく段階を明ら
かにしている。『四教義』と『天台四教儀』はともに階位について詳細に
説明しており、最も多くの分量を占めている。

1. 真理と四門

聖人が言教を繰り返すのは、衆生を教化して真理を悟らせるためである。
教の役割は真理を見出させることにある。『四教義』は全7章によっ
て叙述されているが、第1章では藏通別円など四教の名を解釈し、第2章
では四教によって教える真理について説明し、第3章では四教によって教

える真理に入る門について説明している。

第二弁所詮では次のように述べている。

そもそも教は説明するものであり、真理は説明されるものである。したがって、真理によって教を設定し、教に依ることで真理が明らかになる。つまり真理は教ではなく、すなわち教は真理ではない。真理を離れて教はなく、教を離れて真理はない。ゆえに『思益経』で語られているが、菩提の中に文字はなく、文字の中にも菩提はなく、菩提を離れて文字はなく、文字を離れて菩提はないという。菩提を離れて文字はないため、真実に応じて教を施す。文字を離れて菩提はないため、ゆえに教を施せば直ちに真理を明らかにすることができる。これすなわち教は説明するものであり、真理は説明されるものであるという意味がここにある³²。

教が説明するものは真理である。真理そのものは教ではないが、真理を離れて教はなく、教を離れて真理はない。教を通して真理を明らかにすることができ、このような教を受け入れることで真理を悟ることができる。教は真実を実現するものである。

第三名四門入理で次のように述べている。

真性実相の真理を探してみると、それは微細にして微妙で断ち切られており、一切世間と符合できない。ただし大聖は真理に通じる門をはっきりと御覧になり、それゆえに言葉にできない真理について、縁に応じて教として門を立てる。このような理由で、この教を受け入れる衆生は、門によって真理と符合する³³。

実相の真理は微妙で、衆生は容易に到達できない。真理を悟った聖人は真理とそこに通じる門を知っており、衆生との縁があれば教として門を立て

てくれる。衆生がこのような教を受け入れれば、門を通して真理に到達することができる。このように、教の役割は門を通して真理に到達させることである。この意味で『四教義』では真理とそこに通じる門を重視している。

このように『四教義』では、所詮の真理と、そこに通じる教門と観門の四門を重視している。

『天台四教儀』では、所詮の真理とそこに通じる四門についての体系的記述を見出しにくい。だが、化法四教を説明しつつ四種四諦について言及しており、四教の階位についての説明で、見思惑と塵沙惑そして無明惑という迷惑を破壊し、空仮中の真理を悟る段階について語っている。また、四教修行があることに言及してから、その中で円教の十乗観法について説明している。

まず、化法四教を説明しながら、生滅・無生・無量・無作の四種四諦があることを明らかにしている。藏教を説明しつつ、三乗のうち声聞人が生滅四諦教に基づくことを語っている³⁴。生滅四諦のうち、滅諦によって苦と集を滅ぼし偏真理を明らかにする³⁵として、藏教の生滅四諦教は空諦に入ることができる³⁶と述べている。生滅四諦について述べてから、四教はそれぞれ生滅四諦、無生四諦、無量四諦、無作四諦があることに言及している³⁶。

次に化法四教の階位を説明しながら、迷惑を破壊して真理を悟る段階について語っている。見思惑と塵沙惑そして無明惑を破壊し、空仮中の真理を表わすと説明している。しかし、四教が説明する真理があり、教門や観門などの門を通じてそこに入り、入る段階があって階位として区分されるという、このような体系をもって説明してはいない。

特に『天台四教儀』は、教門や観門などの門について言及していない。ただし、依教修行について述べており、特に円教の十乗観法について説明している。

2. 三諦と階位

『四教義』は全7章として叙述されているが、第4章では四教で教える真理を悟る段階として、階位について説明している。ここでは四教の階位について、空仮中の三諦を中心に説明している。

藏教では三乗それぞれの個別的階位を明らかにしているが、この中で声聞乗の階位について詳しく説明している。毘曇の有門では七賢位³⁷と七聖位³⁸について語っており、成実論の空門では二賢と二十五聖について語っている³⁹。たとえ様々なものに分けるとしても、いずれも空諦の悟りを基準にしている。

通教では三乗の階位に対して十地の一つだと明らかにしている⁴⁰。三乗はすべて体法として空に入るからである。しかし、迷惑と習気を断ち切るときに違いがある。声聞は見思惑の正使を断ち、縁覚は習気を侵犯し、菩薩は習気さえも断ち切る⁴¹。

別教では菩薩の階位を明らかにしている。『四教義』では、様々な經典と論書から別教菩薩の階位を明らかにしているが、その名前と数字は異なり、断と伏の高低もまた異なるとした。この中で、階位の名前と数字は『瓔珞經』に従い、断と伏の高低は『摩訶般若波羅蜜經』の空觀と仮觀そして中觀によるもの⁴²であった。そして『瓔珞經』にある十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺など五十二位と三觀を結合している。十信で空觀を磨いて見思惑を伏し、十住で見思惑を断じて空諦を証得し、十行で仮諦に入り、十廻向で中觀を磨いて無明惑を伏し、十地で中諦を悟り、等覺で無明惑の習気を断ち、妙覺で習気をすべて断つ⁴³。

円教でも菩薩の階位を明らかにしているが、別教とは様々な側面で異なる⁴⁴。円教菩薩は五品弟子位の中で初隨喜心から一心三觀を磨いて無明惑を伏す⁴⁵。十信から見思惑と塵沙惑を断って⁴⁶空諦と仮諦を証得し、続いて十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺など四十二位を経て無明惑をすべて断って中諦を証得する。

このように『四教義』で四教の階位を明らかにするのに、空仮中の三諦を基盤としていることが分かる。

『天台四教儀』では化法四教について説明しながら、主に階位について述べている。藏教の声聞階位については、凡位と聖位に分けられている。外凡として五停心、別相念処、総相念処があり、内凡として煖・頂・忍・世第一があり、真諦、言い換えれば空諦を見て聖位に上がるが、ここには見道と修道そして無学道がある。また、縁覚について説明しつつ、十二因縁を観じて真諦の真理を悟ることを語っている⁴⁷。また、菩薩について説明しつつ、一刹那に世第一位に入って真無漏を発するが、三十四心で見思惑の習気を断ち切り成仏することを語っている⁴⁸。このように藏教の三乗は、同じく見思惑を断って偏真理の空諦を証得する⁴⁹という。

通教を説明しながら、三乗が同様に体色入空すること⁵⁰に言及している。『摩訶般若波羅蜜經』に基づき十地の階位を語っているが、真諦の真理を見て階位が上がることを説明している⁵¹。三乗のうち菩薩は鈍根と利根がある。鈍根菩薩は偏空を見て成仏するが、三乗根性のために無生四諦の法輪を転ずる⁵²。利根菩薩は空だけでなく不空も見る。不空はすなわち中道だが、但中を見ると別教に被接し、不但中を見ると円教に被接する⁵³。

別教を説明するのに、無量四諦と無量十二因縁そして菩薩の歴劫修行について言及している⁵⁴。菩薩が迷惑を破って真理を証得する階位について、『瓔珞經』にある十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺など五十二位で説明している。ここで従仮入空觀により真諦を見、従空入仮觀により俗諦を見、中道觀で中道を証得する⁵⁵と言い、成仏してから鈍根菩薩のために無量四諦の法輪（無量四諦法輪）を転ずる⁵⁶とした。

円教を説明するのに、階位について『法華經』と『瓔珞經』にある五品弟子位、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺などで説明している⁵⁷。このうち五品弟子位の初隨喜品で、心が即空即仮即中の三諦円融であることを知って喜び、内には一心三觀として三諦円融を觀じ、外には五悔として理解を助ける⁵⁸とした。真諦と俗諦を見て六根清浄位の十信に上

り、中道を証得して十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の四十二位に上がる⁵⁹とした。

このように『天台四教儀』は、四教の階位を説明するのに空仮中の三諦を基盤にしていることが分かる。

IV. 結論

『四教義』と『天台四教儀』はどちらも蔵通別円の四教を中心に様々なことを説明しているが、叙述形式と中心内容の観点から比較をしつつ違いを明瞭にして、その理由を明らかにし、また共通点を発見した。

『四教義』はまず蔵通別円の四教を叙述してから、後に五時教の経教について叙述している。四教をもとに経典を理解し、そこに説かれたように修行をすればすぐさま真理を悟ることができるからである。『天台四教儀』は先に五時教の経教について述べてから、後に蔵通別円の四教を述べている。まず薬の処方があり、次に薬の服用で治癒するように、薬の処方に該当する経教を先に述べ、薬の味に該当する蔵通別円などの四教を後で述べたのである。

『四教義』では先に修行を述べてから次に階位を述べている。聖人は衆生との縁があれば真理について説き、これに伴い教門と観門が形成される。衆生が修行を通じて教門と観門に入ると真理に出会うことができるが、このような真理を悟る段階が階位である。この意味で『四教義』では、まず修行について述べてから、次に階位を述べている。『天台四教儀』では、第二化法四教で三観によって迷惑を破壊して上がる階位について分別したのち、第三四教修行で依教修行を言いつつ十乗観法について説明している。このような説明を見ると、教から観が出て、観を通して迷惑を破壊して真理を悟っていくという側面は探すことができるが、観から教が出て、教を通じて迷惑を破壊して真理を悟っていくという側面は見出しにくい。これは真理から教門と観門が起こり、修行を通じてこれらの門に入り、真理に

出会うことができ、その段階として階位があるという体系が確立されていないためであり、特に教門によりただちに真理に通じるという側面がないからだと見ることができる。

『四教義』は門を通じて真理に入らなければならないことを語っており、真理とそこに通じる門を重視している。この意味で、四教で説明する真理について述べ、続いて真理に通じる教門と観門の四門について述べている。『天台四教儀』では、四教で説明する真理とそこに通じる四門の体系的説明を見つけるのが難しい。

『四教義』では四教の階位を明らかにするのに空仮中の三諦を基盤としている。『天台四教儀』では化法四教について説明しつつ、主に階位について述べているが、空仮中の三諦を基盤としている。このように『四教義』と『天台四教儀』では、階位を説明しながらいずれも三諦を基盤としている。

結論的に、『四教義』は四教をもとに経教を理解し、説かれた通りに修行をして真理を悟らなければならないとし、真理とそこに通じる門、そして門に入る段階として階位という体系を確立していた。『四教義』は薬の処方にあたる経教を知らなければならず、薬の味にあたる四教を理解して、修行して真理を悟らなければならないとし、『四教義』と『天台四教儀』は四教の階位を説明しながら、いずれも空仮中の三諦を基盤にしていることがわかった。

主題語（キーワード）

天台、四教、五時教、三諦、教門、観門、信行、法行、階位。

[参考文献]

『摩訶一般若波羅蜜經』（『高麗大藏經』5）。

『妙法蓮華經』（『高麗大藏經』9）。

龍樹、『大智度論』（『高麗大藏經』14）。

龍樹、『中論』（『高麗大藏經』16）。
智顓、『摩訶止觀』（『大正藏』46）。
智顓、『四教義』（『大正藏』46）。
智顓、『維摩經玄疏』（『大正藏』38）。
諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46）。

【注】

- 1 智顓、『四教義』（『大正藏』46, p.768上），“佛用四教 成一切頓漸諸經論 釋經豈越四教也…中略…釋迦出世 所有經教 更不過此四教 攝此諸經 罄無不盡。”
- 2 智顓、『四教義』（『大正藏』46, p.725中），“末代 弘經之人 採衆經義 用通一論 遂致 使後生皆謂 論富經貧 輕經重論 今採衆經論 立四教義 以通諸大小乘經者 意望後賢 敬重佛言 棄其枝末 若能專心 大乘方等 聽說受持 讀誦書寫 如說修行 非但功不唐捐 亦能契理之要也。”
- 3 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.774下），“頓等四教是化儀 如世藥方 藏等四教名化法 如辨藥味 如是等儀 散在廣文 今依大本 略錄綱要。”
- 4 智顓、『四教義』（『大正藏』46, p.725中），“今約諦明理 理能起教 教能詮理 教是能詮 理是所詮 今明所詮義 略爲四意 一約四諦之理以明所詮 二約三諦之理以明所詮 三約二諦之理以明所詮 四約一諦之理以明所詮也。”
- 5 智顓、『四教義』（『大正藏』46, p.725中），“有四種四諦 一生滅四諦 二無生四諦 三無量四諦 四無作四諦也。”
- 6 智顓、『四教義』（『大正藏』46, pp.727下-728上），“三諦名義 具出瓔珞仁王二經 一者有諦 二者無諦 三者中道第一義諦…中略…中論偈云 因緣所生法 我說即是空 此即詮眞諦 亦名爲假名 即詮俗諦也 亦是中道義 即詮中道第一義也。”
- 7 智顓、『四教義』（『大正藏』46, p.728上），“二諦有二種 一者理外二諦 二者理內二諦。”
- 8 智顓、『四教義』（『大正藏』46, p.728下），“今此 以一實諦 爲所詮之理也。”
- 9 四悉檀是世界悉檀、為人悉檀、對治悉檀、第一義悉檀を言い、『大智度論』に出る。これらそれぞれの目的は、聞く者を歓喜させ、善を起こさせ、悪を破らせ、真理を悟らせること。龍樹、『大智度論』（『高麗大藏經』14, p.495中），“有四種悉檀 一者世界悉檀 二者各各爲人悉檀 三者對治悉檀 四者第一義悉檀 四悉檀中 一切十二部經 八萬四千法藏。”
- 10 智顓、『四教義』（『大正藏』46, p.730中），“第三明用四悉檀起四門之教者 若外道四門 皆不見根緣 執心取相定說 如舊醫常用乳藥治一切病 此不因四悉檀

而起四門也 今佛法四門 皆因四悉檀而起也 一明悉檀起三藏教四門 二明悉檀起通教四門 三明悉檀起別教四門 四明悉檀起圓教四門。”

- 11 智顗,『四教義』(『大正藏』46, pp.730下-731上),“第四明約十法成四門義者 外人亦說四門 但不爲十法所成 故諸顛倒流轉生死 不得解脫 今佛法四門 皆爲十法所成 必得涅槃 故不同外人也 就此即爲四 一十法成三藏教四門 二十法成通教四門 三十法成別教四門 四十法成圓教四門。”
- 12 智顗,『四教義』(『大正藏』46, p.731中-下),“第五明信法兩種四門不同者 外人不信三寶 不學佛法 邪信邪行 雖有四門 非佛弟子 豈成信法兩行 今明佛弟子 深信佛教 修集佛法 能發無漏 故成信法兩行 若信行人 即是四種教門 若法行人 即是四種觀門 是則信行人 以佛教門 出三界苦 約四教 各有四種教門 一往則有十六種教門 十六種信行人 約四教 各有四種觀門 一往即有十六種觀門 十六種法行人 若細分別四教 則有能所信法兩行 教門無量無邊 信行亦無量無邊 觀門無量無邊 法行亦無量無邊。”
- 13 智顗,『四教義』(『大正藏』46, pp.731下-732上),“若是三藏教四門 雖俱得入道 而諸經論 多用有門 通教四門 雖俱得入道 而諸經論 多用空門 別教四門 雖俱得入道 而諸經論 多用亦有亦空門 圓教四門 雖俱得入道 而諸經論 多用非有非空門也。”
- 14 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, pp.776上-777下),“第一三藏教者 一修多羅藏(四阿含等經) 二阿毘曇藏(俱舍婆沙等論) 三毘尼藏(五部律) 此之三藏名通大小 今取小乘三藏也…中略…上來所釋三人修行證果雖則不同 然同斷見思 同出三界 同證偏真 只行三百由旬入化城耳 略明藏教竟。”
- 15 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, pp.777下-778上),“次明通教者 通前藏教 通後別圓 故名通教…中略…般若方等部內共般若等 即此教也 略明通教竟。”
- 16 『摩訶般若波羅蜜經』(『高麗大藏經』5, p.289上),“云何爲初地 乃至 十地 所謂 乾慧地 性地 八人地 見地 薄地 離欲地 已作地 辟支佛地 菩薩地 佛地。”
- 17 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.778上-778下),“次明別教者 此教明界外獨菩薩法…中略…如此流類甚衆 須細知當教斷證之位至何位斷何惑證何理 往判諸教諸位 無不通達 略明別教竟。”
- 18 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, pp.778下-780上),“次明圓教者 圓名圓妙 圓滿圓足 圓頓 故名圓教也…中略…是故深識六字 不生上慢 委明即字 不生自屈 可歸可依 思之擇之 略明圓教位竟。”
- 19 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, pp.778下-779上),“又復如來滅 若聞是經 而不毀咎起 隨喜心…中略…若坐若立 若行處 此中便應起塔 一切天人 皆應供養

如佛之塔。”

- 20 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.778上),“藏是界內小拙 不通於大故小析色入空故拙 此教三人 雖當教內有上中下異 望通三人 則一概鈍根 故須析破也。”
- 21 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.777下),“謂三人 同以無言說道 體色入空 故名通教。”
- 22 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.778中),“用從假入空觀 是真諦理…中略…用從空入假觀 見俗諦…中略…一歡喜 [從此用中道觀 破一分無明 顯一分三德 乃至等覺 俱名聖種性]。”
- 23 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.779上),“初五品位者 一隨喜品…中略…故名隨喜 內以三觀 觀三諦境 外以五悔 勤加精進 助成理解。”
- 24 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.780上),“然依上四教修行時 各有方便 正修 謂二十五方便十乘觀法 若教教各明 其文稍煩 義意雖異 名數不別 故今總明 可以意知。”
- 25 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.780中-下),“此二十五法 為四教前方便 故應須具足 若無此方便者 世間禪定 尚不可得 豈況出世妙理乎 然前明教 既漸頓不同 方便亦異 依何教修行 臨時審量耳。”
- 26 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.780下),“次明正修十乘觀法 亦四教名 同義異 今且明圓教 餘教例此。”
- 27 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.780下),“一觀不思議境 謂觀一念心 具足無減 三千性相 百界千如 即此之境 即空即假即中…中略…四破法遍 謂以三觀 破三惑 三觀一心 無惑不破…中略…五識通塞 謂苦集 十二因緣 六蔽 塵沙 無明為塞 道滅 滅因緣智 六度 一心三觀為通…中略…六道品調適 謂無作道品…中略…十離法愛 謂莫著十信 相似之道 須入初住 真實之理。”
- 28 智顛,『四教義』(『大正藏』46, p.724上),“問曰 四教 從何而起 答曰 今明四教 還從前所明 三觀而起 為成三觀 初從假入空觀 具有折體拙巧 二種入空不同 從折假入空故 有藏教起 從體假入空故 有通教起 若約第二從空入假之中 即有別教起 約第三一心中道正觀 即有圓教起 問曰 三觀 復因何而起 答曰 三觀 還因四教而起。”
- 29 智顛,『四教義』(『大正藏』46, p.724上),“問曰 觀教 復因何而起 答曰 觀教 皆從因緣所生四句而起 問曰 因緣所生四句 因何而起 答曰 因緣所生四句 即是心 心即是諸佛不思議解脫 諸佛不思議解脫 畢竟無所有 即是不可說 故淨名 杜口默然無說也 有因緣故 亦可得說者 即是用四悉檀 說心因緣所生之四句 赴

四種根性 十二因緣法所成衆生而說也 四種根性者 一者下根 二者中根 三者上根 四者上上根 赴此四種根性故 因此教觀 無礙而起 普利益衆生 得成信法兩行之益 此即 若聖說法 若聖默然之義也。”

- 30 因緣所生之四句は中論の三諦偈を言う。智顛、『維摩經玄疏』（『大正藏』38, p.533中），“中論 破諸異執 既說因緣所生四句 通佛四說 即是四教之意也。”；龍樹、『中論』（『高麗大藏經』16, p.392中），“衆因緣生法 我說即是無 亦爲是假名 亦是中道義。”
- 31 『摩訶止觀』では六根と六境が相對して一念心が起こるが、それが即空即仮即中として不可思議であると述べた。智顛、『摩訶止觀』（『大正藏』46, pp.8下-9上），“次根塵相對 一念心起 即空即假即中者 若根若塵 並是法界 並是畢竟空 並是如來藏 並是中道…中略…此一念心 不縱不橫 不可思議。”
- 32 智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.725中），“夫教是能詮 理是所詮 故因理設教 籍教顯理 即理非教 即教非理 離理無教 離教無理 故思益經云 菩提之中 無文字 文字之中 亦無菩提 離菩提無文字 離文字無菩提 以離菩提無文字 故約理而施教 以離文字無菩提 故施教 即能顯理 是則教爲能詮 理爲所詮 意在於此。”
- 33 智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.729上），“尋眞性實相之理 幽微妙絕 一切世間 莫不能契 但以大聖 明鑒通理之門 乃於無言之理 赴緣 以教爲門 是以 稟教之徒 因門契理。”
- 34 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.776上），“大師 稱小乘 爲三藏教 此有三乘根性 初聲聞人 依生滅四諦教。”
- 35 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.776下），“三滅諦者 滅前苦集 顯偏眞理 因滅會眞 滅非眞諦。”
- 36 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.776下），“然如前所列 四諦名數 通下三教 但是隨教 廣狹勝劣 生滅 無生 無量 無作 不同耳。”
- 37 智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.732下），“今正約毘曇有門解釋 次下別略明空門辨位 就有門明位即爲二意 一明七賢位 二明七聖位 一明七賢位者 一者五停心觀 二別想四念處 三總想四念處 四煖法 五頂法 六忍法 七世第一法 是爲七賢位也。”
- 38 智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.739上），“二明七聖位者 一隨信行 二隨法行 三信解 四見得 五身證 六時解脫羅漢 七不時解脫羅漢。”
- 39 智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.741上），“次明三藏教空門入道二十七賢聖位者 信法二行 即是兩賢 在方便道空門 發眞無漏 斷見惑未盡 無行 即須陀洹 近向 見惑盡 名須陀洹果 空解增明 斷欲界思惟一品 乃至 五品 名斯陀含向 斷

六品盡 即是斯陀含果 斷七品八品盡 名阿那含向 欲界九品五下分盡 即是阿那含果 阿那含 有十一種 帶果行向 即是阿羅漢向 進斷上二界思惟也 非想九品盡 即是阿羅漢果 是阿羅漢 有九種 賢人有二 聖有二十五 合有二十七賢聖 具出成論。”

- 40 智顗,『四教義』(『大正藏』46, p.748中),“第三正明通教三乘位者 即爲二意 一明三乘共行十地 二簡名別義通 一明三乘共行十地位者 即爲二意 一標名 二解釋 一標名者 一乾慧地 二性地 三八人地 四見地 五薄地 六離欲地 七已辨地 八辟支佛地 九菩薩地 十佛地。”
- 41 智顗,『四教義』(『大正藏』46, p.747下),“第二略明約通教開三乘者 此通教約因緣即空之理 分三乘也 三人同稟通教 見第一義諦 同斷三界見思 得一切智 同求有餘無餘二種涅槃 此義既同 故約通教義 以辨位也 而分爲三乘者 聲聞總想體法入空 智慧力弱 但斷正使 根性不同 亦有二種解脫 如前三藏教中分別緣覺 福德利根 能少分別 別想體法入空 生無佛世 不因聞法 時至道熟 自然曉悟 見第一義 斷三界結盡 侵除習氣 是名辟支佛乘 根性不同 亦有二種 一者小辟支迦羅 二者大辟支迦羅 已如前說 若菩薩 具修總想別想智慧 體因緣即空 起大悲誓願 以修諸行 見第一義 斷界內煩惱 用誓願扶習還生三界 用道種智遊戲神通 淨佛國土成就衆生 三乘善根淳熟即坐道場 用一念相應智慧 斷煩惱習盡。”
- 42 智顗,『四教義』(『大正藏』46, p.752上-中),“一位數多少有不同者 如華嚴經明三十心十地佛地 有四十一地 瓔珞經 明五十二位 仁王經 明五十一位…中略…如此等諸經論 明諸菩薩位 名數多少不同 斷伏高下亦異 對諸法門明位非無殊別…中略…今明別教大乘次位 須用瓔珞仁王兩經 若明斷伏高下 須約大品三觀 若明觀行 對法門意 屬涅槃五行 釋義 對諸法門 隨便 採諸經論 一家說法 正在初心 觀門教門須分明也。”;『摩訶般若波羅蜜經』(『高麗大藏經』5, p.288上),“菩薩摩訶薩 欲具足道慧 當習行般若波羅蜜 菩薩摩訶薩 欲以道慧 具足道種慧 當習行般若波羅蜜 欲以道種慧 具足一切智 當習行般若波羅蜜 欲以一切智 具足一切種智 當習行般若波羅蜜 欲以一切種智 斷煩惱習 當習行般若波羅蜜。”
- 43 智顗,『四教義』(『大正藏』46, pp.752下-753上),“二約大品經及三觀合位明斷伏高下者 大品經云 佛告舍利弗 菩薩 欲具足道慧 當學般若波羅蜜 此即是十信習從假入空 伏愛論見論欲 入十住位 若得十住 即斷界內見思也 欲以道慧 具足道種慧 當學般若 此即從空入假入十行也 欲以道種慧 具足一切智 當學般若 此即修中道正觀 入十迴向位也 欲以一切智 具足一切種智 當學般若 此即

是證中道正觀 入十地也 欲以一切種智 斷煩惱習 當學般若 此即是等覺地也 無明煩惱習盡 名之爲佛 即是妙覺地也。”

- 44 『四教義』では5つの側面から相違を明らかにしている。智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.760中），“今略更用五義 釋別圓兩教不同之相也 一約斷無明判位 高下不同 二約斷界內界外見思不同 三約斷不斷不同 四約位明法門別圓不同 五約位通不通不同。”
- 45 智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.760中），“若圓教所明 從初隨喜心 修一心三觀 入十信位 斷界內惑盡 即伏界外無明 十住初心 即發眞智 斷無明住地初品 從此四十心 皆斷無明 至等覺後心 無明方盡 妙覺極地 肅然累外 名究竟菩提 無上之涅槃也。”
- 46 智顛、『四教義』（『大正藏』46, p.762下），“故仁王般若經云 十善菩薩 發大心 長別三界苦輪海 故知住此十信之位 斷界內見思盡 破界外塵沙無知 伏無明住地之惑也。”
- 47 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.777上），“因觀十二因緣 覺眞諦理 故言緣覺。”
- 48 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.777中-下），“次一剎那入世第一位 發眞無漏 三十四心頓斷見思習氣 坐木菩提樹下 生草爲座 成劣應丈六身佛。”
- 49 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.777下），“上來所釋 三人修行 證果雖則不同 然同斷見思 同出三界 同證偏眞 只行三百由旬 入化城耳。”
- 50 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.777下），“又從當教得名 謂三人 同以無言說道 體色入空 故名通教。”
- 51 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.777下），“依大品經 乾慧等十地 即是此教位次也 一乾慧地…中略…三八人地 四見地 此二位入無間三昧 斷三界八十八使見盡 發眞無漏 見眞諦理…中略…十佛地 機緣若熟 以一念相應慧 頓斷殘習 坐七寶菩提樹下 以天衣爲座 現帶劣勝應身成佛。”
- 52 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.777下），“爲三乘根性 轉無生四諦法輪 緣盡入滅 正習俱除 如炭灰俱盡。”
- 53 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.778上），“若利根菩薩 非但見空 兼見不空 不空即中道 分二種 謂不但 若見但中 別教來接 若見不但中 圓教來接。”
- 54 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.778上），“涅槃云 四諦因緣 有無量相 非聲聞緣覺所知 諸大乘經 廣明菩薩歷劫修行 行位次第 互不相攝 此並別教之相也。”
- 55 諦觀、『天台四教儀』（『大正藏』46, p.778中-下），“用從假入空觀 是眞諦理…

- 中略…用從空入假觀 見俗諦…中略…從此用中道觀 破一分無明 顯一分三德
…中略…十法雲地 [已九地 地地各斷一品無明 證一分中道].”
- 56 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.778下), “爲鈍根菩薩衆 轉無量四諦法輪 即此佛也.”
- 57 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, pp.778下-779上), “今且依法華纓絡 略明
位次 有八 一五品弟子位 [外凡出法華經] 二十信位 [內凡] 三十住位 [聖初]
四十行 五十迴向 六十地 七等覺 [是因位末] 八妙覺 [是果位].”
- 58 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, p.779上), “初五品位者 一隨喜品…中略
…此心即空即假即中 常境無相 常智無緣 無緣而緣 無非三觀 無相而相 三諦
宛然 初心知此 慶己慶人 故名隨喜 內以三觀 觀三諦境 外以五悔 勤加精進 助
成理解.”
- 59 諦觀,『天台四教儀』(『大正藏』46, pp.779中-780上), “次進六根清淨位 即是
十信 初信斷見惑 顯真理…中略…次從八信 至十信 斷界內外塵沙惑盡 假觀現
前 見俗諦理…中略…次入初住 斷一品無明 證一分三德 謂解脫般若法身…中
略…次從一住 至十住 各斷一品無明 增一分中道…中略…更破一品無明 入等
覺位 此是一生補處 進破一品微細無明 入妙覺位.”

李承南氏の発表論文に対するコメント

韓 劍英*著・伊吹 敦**訳

福州で開催された「第10回 中・日・韓 国際仏教学術大会」に参加し、光栄にも主宰者から金剛大学校の李承南教授の「智顛の『四教義』と諦観の『天台四教儀』の比較研究」と題する発表にコメントをする機会を与えられたことを心から喜んでおります。私は見識も浅く、学識も微々たるものですが、それにも関わらず、コメンテーターの任をお引き受けしましたのは、この機会をお借りして、李教授の最新の研究成果に触れ、また、天台の「四教」に関する歴史文献と哲学思想についての自分の理解を深めようと思ったからです。理解とコメントに不正確なところがあれば、李教授のご批判、ご教示をお願いしたいと存じます。

天台の「五時八教」の思想は、智者大師が南北朝期の諸家の説を批判的に摂取して発展させたもので、特に南北朝期の「南三」（南地の説三種）、「北七」（北地の説七種）を批判的に摂取して唱えられた理論的体系的な教相判釈説です。しかし、智顛の著作を実際に見てみると、この「五時八教」の思想は、智者大師自身がはっきりとした形で提示したのではなく、智者大師の複雑、深遠、詳細な思想の所々に隠されており、一般の人や天台の学徒にはとても把握しがたいものです。後に灌頂大師は『天台八教大義』一卷を著して、初めて「化儀四教」と「化法四教」を合して「八教」と呼びました。「一卷」という短い分量のため、非常に理解しやすいものですが、「五時八教」という理論的枠組みはまだ完成しておらず、智者の教判思想を総体として深く理解するということにまでは至っていません。中唐期

*北京信息科技大学人文社科学院副教授。

**東洋大学文学部教授。

の湛然も、智者大師の教判思想を非常に重視しましたが、「五時八教」の理論的枠組みを明確化するという点では成果は認められません。この[「五時八教」を整備するという]歴史的任務は、北宋の初めになってようやく完成します。「五時八教」という理論的枠組みを初めて明確な形で提出したのが、「(高麗) 諦観」の著作とされる『天台四教儀』一巻なのです。

しかし、諦観の『天台四教儀』を見ますと、「五時八教」という理論的枠組みに沿って論じてはいません。李教授が論文の中で分析しているように、諦観の『天台四教儀』は智顛の『四教儀』を継承し、天台の「化法四教」(藏・通・別・円)を中心に置いて、それに基づいて各項目を説明しているのです。両者の中心的な内容には多くの共通性が認められますが、中でも特に注目されるのは、

1. 「化法四教」を中心に各項目の説明を行っている。
2. 「空」「仮」「中」という「三諦」を立脚点として、修行の階位を説明している。

という二点です。

ただし、叙述形式の上で、特に論述の順序という点で明確な相違が二点認められます。第一は、智顛の『四教義』は、先に「四教」について説明した後、に經典の教えを説明しますが、諦観の『天台四教儀』では、先に經典の教えを説明した後、に「四教」について説明するという点です。第二は、智者の『四教義』は、先ず修行を説明した後、に階位を述べますが、諦観の『天台四教儀』では、先に階位の相違を明らかにした後、に修行について説明するという点です。その外にも、[論文を]読んでいる時に、李教授が両者の内容が大体同じであることを説明するに当たって、相違点があることにも言及していることに気づきました。つまり、

1. 諦観の『天台四教儀』には、真理（真性実相の理）、ならびに真

理に至る「四門」についての体系的な論述がない。

2. 諦観の『天台四教儀』は、先に四教の「理」を説き、その後、「理」に入るための「教」と「観」の「二門」を論じ、最後に「門」から「理」に入る際に経るべき段階と階位について明らかにするといい体系的な説明を行っていない。
3. 特に、『天台四教儀』は、「教門」や「観門」といった「門」についての言及を欠いている。

といった点です。

上に挙げたような相違点について、李教授は、テキストの内容を詳細に整理したうえで、両者がこのような明確な相違を示すことの背後にある原因を次のように非常に明確な形で明らかにしています。つまり、智顛の『四教義』は「四教」を基礎に經典を理解したのですが、諦観の『天台四教儀』は、『四教義』の「教を藉^かりて理を悟る」という論理的な構造を用いなかった、あるいは重視しなかったというわけです。李教授は、このことを論文の中で次のように指摘しています。

「これは真理から教門と観門が起り、信行人と法行人の修行者が修行を通じてこれらの教門と観門に入れば真理に出会うことができ、真理を悟る段階としての階位があるという、このような体系が確立されていないためである。何より教門によって直ちに真理に到達することができるが、このような側面が見落とされているからだと思われる。」

以上に見るように、李教授の論文は論証が非常に詳細であるため、残念ながらその全てについて言及するわけにはいきません。教授の論点は非常に明確で、その結論も非常に啓発的なものです。私たちが天台思想や宋代の仏教思想史を深く理解するうえで大いに役立ちます。

北宋の後、「化法四教」の思想は非常に重視され、天台の学者たちは「四教」で「四根性」を教化することを、仏教の根本教義であり、天台教学の完成であると考えようになりました。宋学の先覚者である天台の学者、弧山智円(976-1022)は、「化法四教」が「教化の道」としての仏教の全てであり、仏教が衆生を教化する際の大乗・小乗という方法の核心を全て統合するものであると考えました。つまり、「四教」は、「三蔵即小乘法、通・別・円即大乘法、諸仏施教、不出此四」(『金剛鉿顕性録』巻四、続蔵56冊)というように大小乗の教えを全て網羅するということです。智円は「三観の学」、「四教の道」を綱要と見做し、「真心」を「境」、「理性」を「総」として、衆生が「凡」から「聖」になり、「妄」を除いて「真」に帰るための修行として重視しました。智円は隋・唐の交代期に天台智顛が打ち立てた教学体系を承継ぎ、中唐の荊溪湛然以来の天台学の変化をよく理解した上で、北宋の社会的現実立脚して、蔵・通・別・円の四教に相当する大乗・小乗の経典を選びましたが、最も重要なことは、彼が天台の「三観の学」の「中道観」と、「四教の道」の「教学観」と、儒家思想の間に通路を開き、事実上、天台教学の範囲を拡大したということです。

[私が読んだ] 李教授の論文は、韓国語で書かれたものを中国語に訳したものであるために、最後の部分の内容がやや明瞭さを欠いています。例えば、智顛の『四教義』と諦観の『天台四教儀』の「相違点」が、「共通点」の説明の中にしばしば見出されることなどがそれに当たります。現在の論文の構成は、先に「相違点」について述べた後に「共通点」を述べる形になっていますが、もしも先に「共通点」を述べた後に「相違点」について述べる形式に改めたなら、よりテーマがはっきりしたものになったのではないのでしょうか。また、「要旨」の部分には冗長な部分があり、論文自体にも重複等が見られます。しかし、「瑕、玉を掩わず」の諺のように、李教授の精緻な文献学的考察、天台思想に関する豊富な知識、厳格な論証方法等は、いずれも我々が真摯に学ぶに値するものです。

この機会をお借りして次の二つの関連する問題を李教授にお尋ねしたい

と思います。

1. 資料の記載によれば、諦観が撰述した『四教儀』はもともと上下二巻に分かれており、上巻では天台宗の教判を述べ、下巻では南北の諸師の見解の問題点を説明していたとされています。ところが、後世に伝わったのは上巻のみで、しかも、「刻天台四教儀引」に、「今所伝者上卷耳、言約義該、実為台教之関鑰、学者了此則一化大綱、思過半矣。……因追前志、捨質刻四教儀一卷并科文、行于世」（『四教儀縁起』、大正藏46、774頁、「壬午春仏歡喜日病居士馮夢禎撰」と述べられているように、多くの場合、上巻のみが流布したことが良いことであるかのように見られていました。李教授は、このことについてどのようにお考えでしょうか？
2. 天台の「五時八教」について、智顛の『四教義』は「化法四教」を中心に各項目の論述を行いました。諦観は『天台四教儀』で、それを継承したにもかかわらず、なぜ最終的に、智顛の『四教義』の「教を藉りて理を悟る」という基本的な論理構造を用いなかった、あるいは蔑ろにしたのでしょうか？ 諦観は意図的に軽んじたのでしょうか、それとも理論的な面から無視したのでしょうか？ 意図的であったのなら、その目的は何で、軽んじた結果、どうなったのでしょうか？ 北宋以降、天台の学者たちが堅持したのは、主として智顛の『四教義』の論理だったのでしょうか、それとも諦観の『天台四教儀』の論理だったのでしょうか？

私は甚だしい浅学ではありますが、千百年前の智者大師と諦観大師が私たちに価値ある尊い思想を残してくれたことに敬意を表したいと思います。また、李教授が素晴らしい論文を書かれたこと、また、惜しみなく御教授くださることに感謝申し上げます。

韓劍英氏のコメントに対する回答

李 承南*著・水谷 香奈**訳

韓劍英先生、論文を仔細に読んでコメントをしていただき、ありがとうございます。2つのご質問をいただいたので、以下のようにお答えします。

最初の質問は次のとおりです。『天台四教儀』はもともと2冊ありましたが、第1巻は天台大師の教判に関するもので、第2巻は南北朝時代の教判に関するもので、現在は第1巻のみ流通していますが、これについて多くの人が賛成しており、特に馮夢禎居士の「刻天台四教儀引」を引用し、第1巻のみが流通している部分について質問されました。

これに対して次のようにお答えします。「刻天台四教儀引」で馮夢禎居士は、世世に天台宗を高く掲げて仏国土を清浄にするという誓願を立て、これに従い『天台四教儀』の第1巻を刻んで、科文とともに世に流通させ、世の人をして天台教観という門によって扉を開け仏法藏を究めさせると言いました。これは『天台四教儀』の第1巻で天台教観を理解させ、仏陀の意を知らせるとい趣旨だと見られます。第2巻は現在伝えられておらず、その内容を正確に知ることはできません。しかし『法華玄義』では天台大師以前の教判に対する批判とともに新たな教判を提示しています。これはすなわち天台大師の教判が以前の教判を基にして、新たに提示されたものだと言えます。そういう意味では、以前の教判について参考にする必要があると思います。ただし、ここで強調したいことがあります。天台大師は『四教義』で四教を通して経教を理解させ、仏陀の意を知らせると述べました。彼は四教を説明し、この四教が経教を形成しているのです、四教によ

*이승남 (イ・スンナム)、金剛大学校教授。

**東洋大学東洋学研究所客員研究員。

て経教を理解できると言いました。このように四教によって経教を理解できるようにしたのは、実際に経教を見て勉強させるためです。経教を省略して仏意を理解するためのものではなく、むしろ仏が説いた経教を見て、これを通じて仏意を理解するためのものです。天台大師は経教を重要視しており、このような部分は見落とされてはならないと思います。四教を理解したならば、これを通じて経教を見て、そこで仏陀の意を理解しなければなりません。

2番目の質問は次のとおりです。『天台四教儀』には、教門や観門などの門への言及がなく、ただ依教修行を語っており、教門を通じて真理に直接入る部分が省略されたことについて質問をしたものと考えられます。

これに対して次のようにお答えします。『天台四教儀』では、教相について『法華玄義』と『浄名玄義』を参考にして言及しています。『法華玄義』と『浄名玄義』を見ると、いずれも教門を用いて入る信行と、観門を用いて入る法行について説明しています。ところが、『天台四教儀』では、このような教門と観門を用いて入る信行と法行について言及していません。単に依教修行を語りつつ、四教のうち円教の十乗観法を要約して説明しており、これを通じて真理に入るようにしています。諦観法師が教門を通じて真理に直接入る部分を省略した理由を明確に申し上げることは困難です。ただ、天台教観の中で重要な部分に要約的に言及する意図があり、これを通じて深く広い内容に簡単にアクセスできるようにしようとしたと考えられます。